

伊勢物語 九段「東下り」冒頭

むかし、男ありけり。その男、身をえうなき物に思^{おも}ひ^ひなして、京にはあらじ、あづまの方に住^すむべき国^{くに}求め^{もと}め^めにて行^ゆきけり。もとより友とする人ひとりふたりしていきけり。道^{みち}知^しれる人もなくて、まどひいきけり。三河^{みかは}の国^{くに}、八橋^{やっはし}といふ所にいたりぬ。そこを八橋^{やっはし}といひけるは、水ゆく河の蜘蛛^{くも}手^てなれば、橋^{はし}を八つわたせるによりてなむ、八橋^{やっはし}といひける。その沢^{さは}のほとりの木^きのかけに下^おりあて、乾飯^{かれいひく}食^くひけり。その沢^{さは}にかきつばたいとおもしろく咲^さきたり。それを見て、ある人のいはく、「かきつばたといふ五^{いっもじ}文字^くを句^{かみ}の上にすゑて、旅^{たび}の心をよめ」といひければ、よめる。

唐衣^{からころも} きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅^{たび}をしぞ

思^{おも}ひ^ひ

とよめりければ、皆^{みな}人^{ひと}、乾飯^{かれいひ}のうへに涙^{なみだ}落^おしてほとびにけり。

行^ゆき行^ゆきて、駿河^{するが}の国^{くに}にいたりぬ。宇津^{うつ}の山^{やま}にいたりて、わが入^いらむとする道^{みち}はいと暗^{くら}う細^{ほそ}きに、つたかえでは茂^{しげ}り、物心^{ものこころ}ぼそく、すずろなるめを見ることと思^すふに、修^{しゆ}行者^{ぎやう}あひたり。「かかる道^{みち}はいかで見^みます」といふを見れば、見^みし人^{ひと}なりけり。京^{きやう}に、その人の御^{おん}もとにて、文^{ふみ}書^かきてつく。

駿河^{するが}なる宇津^{うつ}の山^{やま}のうつつにも夢^{ゆめ}にも人^{ひと}にあはぬなりけり

伊勢物語 九段「東下り」*現代語訳*

昔、ある男がいた。その男は、自分の身をこの世に必要な役立たず
と思いきんで、もう都にはいるまい、東の国の方に住むのにふさわしい
土地を見つけようと思って、出かけていった。

以前から志しを同じくする友人の数人と一緒に連れ立って行った。道
を知っている人がいないので、道に迷いながら下って行った。そうこう
するうちに、三河の国の八橋という所に着いた。そこを八橋というのは、
流れる河が蜘蛛の手のように八方に分かれて、それぞれ八つの橋を架け
てあるので八橋というのであった。

そこにある沢の木陰に、馬から下りて、腰を下ろして、乾飯を食べた。
ちよほどその沢に、かきつばたがとても美しく咲いていた。それを見て、
ある人が言った。「かきつばたという五つの文字を、それぞれ句の上に
置いて、折り句として、旅愁を詠め」と言ったので、次のように詠んだ。

普段着慣れた唐衣のように、慣れ親しんだ妻が都にいたので、はるば
る遠くへやってきたこの旅が、しみじみと悲しく思われる

と詠んだので、旅の一行は、食べかけた乾飯の上に涙を落としたので、
ふやけてしまったのであった。

どんどん下って行って、駿河の国に着いた。その宇津山にまで行って、
自分が入ろうとする山道は、ひどく暗く、細い上に、蔦や楓がうっそうと
茂って、何となく心細く、思いがけずひどい目に合いそうだと思っている
と、修行者がやってくるのに出会った。「あなたほどの方が、どうしてこ
のような寂しい道をおいになるのですか」という言葉を聞いて、よく見
ると、かつて都会ったことのある人であった。そこで、都にいる愛しい
お方のもとにというわけで、手紙を書いて託した。

都を離れて、駿河の国にある宇津の山べに来かかっていますが、その山
の名のように、遠く離れているので、現実(うつつ)にも、夢にも、あなたに会わ
ないのですよ。